

2023年3月26日大齋節第5主日説教

エゼキエル書 37 章 1-3 節、11-14 節

ローマの信徒への手紙 6 章 16-23 節

ヨハネによる福音書 11 章 17-44 節

大齋節も 5 主日目となりました。庭の桜も満開ですが、雨のためゆっくりお花見とはいかないようです。また、急激に温度が下がっておりますので、体調にお気を付けください。

イエス様の復活について学び、信仰を深める大齋節ですが、本日の福音書は、ラザロの復活の物語です。ラザロの復活の物語は、復活という事柄について、他の福音書などにはない、大切な事柄を示しています。本日は、復活をお祝いする準備の学びとして、この物語を中心に学びたいと思います。

聖書日課は 11 章 17 節からとなっておりますが、ラザロの復活の物語は、11 章 1 節から始まる長い物語です。聖書日課は後半部分のみです。非常に長い物語ですが、この長い物語のあらすじを、きわめておおざっぱに言えば、ラザロという人が病で死んで、四日経過した後、イエス様によって復活したということです。

この物語は長いのですが、ヨハネ福音書にあるほかの物語と同じように、目的がはっきりしています。その目的とは、この物語を通して、わたしたちが「**神の栄光**」とは何かを知り、またイエス様を「**わたしたちが信じるようになるため**」です。しかし、この物語は、最初から、登場人物間の誤解を示す描写、そして読者に対しても様々な誤解を示す描写があり、決してわかりやすい内容ではありません。なぜそのような物語の展開が複雑なのか、それは、イエス様を信じていても不安がある読者を想定しているからです。

イエス様とマルタまたマリアとのやりとりは、信仰と不安の両方を示しています。それらは、物語世界を超えて、今、この福音書を読んでいるすべての読者の気持ちも反映しているといえます。つまり、福音書を読んでいる人は、イエス様を通して復活の命を信じている、あるいは信じようとしています。しかし、愛する人、大切な人の死を目前にしたとき、その信仰によって、機械的にあるいは自動的に、慰めを受けるわけではありません。不安と悲しみがすぐには無くならないのです。そのことがマルタとマリアの姿に反映しているのです。

しかし、この物語に特徴的な事柄はそれだけではありません。さらに大切なことがあります。それは、イエス様ご自身、ラザロの死を前にして、「**涙を流された**」ということです（ヨハネ 11：35）。これは奇跡物語の中でも非常に珍しい点です。次に、イエス様ご自身が、ラザロの死を前にして、動揺され、そして父なる神様、主なる神様に祈ってくださったということです（ヨハネ 11：38-42）。そのような過程を経て、初めて示された事柄が「**神の栄光**」であり、成立した出来事が、ラザロの復活であると物語は示しているのです。

この物語が示す「**神の栄光**」、それが最もはっきりと示される「復活」は、単なる超自然現象ではありませんが、不思議な事柄です。また、マタイ、マルコ、ルカ、そしてパウロが示すような、未来の終末の時に完成する事柄としても描か

れてもいません。ラザロに起こったように、わたしたちの日常の中で示される事柄として描かれています。そして、それゆえに、その後のラザロは死なないのか、ラザロと同じことはどこでも起こるのか、疑問はたくさん生じますが、大切な事柄は、そこにはありません。この物語が示そうとしている事柄は、復活とはどのような事柄であるかではなく、どのように起こるのかということです。つまり、イエス様のわたしたち一人ひとりのための、悲しみ、憤り、そして祈りを通して起こるということです。それが「**神の栄光**」・「復活」に他ならないのです。だからこそ、わたしたちは、それを信じることができる、この物語はそう告げているのです。

また、「**信じる**」とはどういう事柄であるかについても示しています。つまり、病が治ることや、様々な祈願の成就など、この地上での願いを、かなえてくださることを信じることではないということです。それらをすべて超えて、本当の命へと導くイエス様を信じることにほかなりません。そして、その信仰は、決して機械的・公式的に成立する事柄ではありません。信仰に至る過程において、また信仰し続ける過程において、苦悩があり、悲しみがあります。しかも、信仰は、イエス様ご自身が、共に苦悩し、悲しんでくださった上に成立し、継続する事柄です。わたしたちはこの物語を通して、この信仰へと導かれているのです。そして、イエス様の十字架の苦しみと復活とは、これらを集中して示した表現に他ならないのです。

本日はほとんど触れませんでした。旧約日課エゼキエル書は、『聖書(旧約)』が復活について示している箇所です。しかし、そこで語られている内容は、個人の復活ではなく、イスラエルの再興です。もちろん、その概念が前提となって、イエス様の十字架と復活があります。そして、そうであるがゆえに、イエス様の復活の出来事は、現在過去未来、イスラエルという場所も超えた壮大な出来事です。しかし、壮大であると同時に、それは、イエス様がわたしたち一人ひとりを愛されたがゆえに、そして、悲しまれ、主なる神様に祈ってくださったがゆえに、成立した事柄です。わたしたちも教会に集められ、イエス様の復活にあずかります。それは、わたしたちの悲しみを、イエス様が知ってくださっていることを意味します。たとえわたしたちが、意気消沈したとしても、失望したとしても、祈れなかったとしても、イエス様は、いつも祈ってくださるのです。

この世界には、今も死があり、悲しみがあります。先々週、わたしたちの教会に関わる方がお二人逝去されました。わたしたちも、本日の物語のマルタとマリアのように、復活を信じていますが、すぐに慰めを受けるわけではなく、お二人の逝去を通して、信じること、祈ることの大切さを改めて示されたといえます。もちろん、わたしたちは毎週、コロナ禍が一日も早く終わること、この地上で行われている戦いが終わること、それらのこの世的な事柄を祈ってもいます。しかし、本日の物語は、そのような祈りをせざるを得ないわたしたちのことを、イエス様ご自身がご存じで、今も私たちのために祈ってくださっていることを示しています。その祈ってくださるイエス様は、死に打ち勝たれた方です。何もその方に勝るものはありません。そのイエス様を信じて、これからも歩んでいきたいと思えます。そのイエス様の復活を喜ぶ備えをしたいと思えます。